

複合名詞に見る日本語アクセントの統語機能 — 東京語と厦門語の比較研究

愛知学院大学外国人教師 朱新建

要旨： 一般认为，日语的音调¹⁾和汉语的声调，其主要功能是辨义功能，而对日语音调和汉语声调的构词功能研究不深。在日语的复合词中，原有的音调消失，有规则地产生新的音调。这个新的音调规则，就是日语音调的构词功能。笔者认为，日语音调的构词功能高于辨义功能，应该重视日语音调构词功能的研究。加之复合词以及新的复合词往往辞典里没有或没有标出音调，所以应该运用日语音调的构词规则用于日语教学当中。

另外，汉语闽南方言厦门话里，每个汉字均有 2 个声调，一个是本调，一个是变调。这个变调只在复合名词中倒数第 2 个词里出现，很有规则性，这个变调的构词功能也显然高于辨义功能了。这一点同日语复合词音调的构词功能非常相近。

日本语言学会前会长早田辉洋教授指出，在一定的条件下，日语的声调也可以同汉语的声调进行比较研究，为跨语系的语言之间的比较研究提供了重要的依据。

キーワード： アクセント核 変調 統語規則

1. はじめに

一般に日本語のアクセントや中国語の声調は意味を弁別する機能、即ち弁語機能（朱 1994）が重要視されているのに対して、その統語機能についての研究はまだ不十分である。日本語の東京語アクセントは、特に複合語のアクセントにおいては、弁語機能よりも、統語機能が重要な役割を果たしていると考える。一方、中国語では、弁語機能においては日本語のそれよりは重要であるが、中国語厦門方言の変調(Sandhi)の場合、弁語機能よりも統語機能が働くため、厦門語の変調は統語機能であると見てもよいと考えている。本稿では、日本語のアクセントと中国語の変調に見られる統語機能に焦点をあてて、複合語の中の複合名詞を中心に、東京語と厦門語を比較対照し、アクセントと声調は本来の弁語機能よりも、統語機能がより重要な働きを有していることを明らかにしたい。なお、本稿は 2006 年 5 月に清華大学において開かれた「2006' 清華大学日本言語文化国際フォーラム」で口頭発表した原稿を加筆したものである。

2. 東京語アクセントの弁語機能と統語機能

ここでいう東京語とは、いわゆる日本語共通語のことであるが、東京方言を扱わないことにする。なお、東京語アクセントについては秋永一枝・金田

連母音の特質を反映していることがわかる。①型の頭高型のアクセントを強く有する名詞の「愛」でも、4拍以上の複合名詞になっていくと、ほとんどの語が①型の頭高型から⑥型の平板型や中高型に変調していることがわかる。この例でもわかるように、東京語のアクセントの統語機能は弁語機能より強く働く性質をもっている。

次に、①型語の赤は②型語の垢とはアクセントで意味の区別をしている名詞であるが、表2を見ると、①型語では「赤」のほかに、「赤ちゃん」、「赤点」、「赤とんぼ」の3語である。

表2 赤 + 名詞

語例 ³	3拍語	4拍語	5拍語	6拍以上の語
赤①	①型の語 あかぎ 赤木 あかげ 赤毛 あかご 赤子 あかじ 赤字 あかじ 赤地 あかみ 赤身 あかめ 赤目	①型の語 あか 赤ちゃん あかてん 赤点 ②型の語 あかえい 赤鱒 あかがい 赤貝 あかがし 赤樫 あかまつ 赤松 ③型の語 あかあざ 赤痣 あかえい 赤鱒 あかがね 赤金 あかがみ 赤紙 あかさび 赤錆 あかしお 赤潮 あかじそ 赤紫蘇 あか 赤だし あか 赤チン あかつち 赤土 あかはじ 赤恥 あかはた 赤旗 あかはだ 赤肌 あかばな 赤鼻 あかはら 赤腹 あかぶさ 赤房 あかふだ 赤札 あかぼう 赤帽 あかほん 赤本 あかまつ 赤松 あかみ 赤味噌 あかむけ 赤剥 あかもん 赤門	①型の語 あかとんぼ 赤蜻蛉 ③型の語 あかいわし 赤鯛 あかがえる 赤蛙 あかざとう 赤砂糖 あかでんしゃ 赤電車 あかでんわ 赤電話 あかとんぼ 赤蜻蛉 あかまいし 赤間石 あか がお 赤ら顔 あかんぼう 赤ん坊	③型の語 あかこうのう 赤行囊 あかしんごう 赤信号 あかしんぶん 赤新聞 ④型の語 あか まんま 赤の飯 あかぶどうしゅ 赤葡萄酒 あかめがしわ 赤芽柏

「赤ちゃん」は①型の頭高型しか耳にしませんが、「赤点」はネットで検索すると、辞書にはないが、「赤点娘」、「赤点シスターズ」、「赤点花丸二重丸」、「赤点王子」、「赤点小僧」、「赤点先生」、「赤点主婦」、「赤点ママ」、「赤点マニア」、「赤点せいいかつ 赤点生活」、「赤点どうめい 赤点同盟」、「赤点ほしゅうじゅく 赤点補習塾」、「赤点ギタリスト」、「赤点ブログ」、「赤点ほうていしき 赤点方程式」、「赤点こくふく 赤点克服」、「赤点うらない 赤点占い」、「赤点さくせん 赤点クリア作戦」、「赤点かいひ 赤点回避」、「赤点ひょうか 赤点評価」、「赤点はっしん 赤点発進」、「赤点しょうざい 赤点商材」など、実に数多くの造語があることがわかる。これらの造語を2人の女性の方に発音を協力していただいた。Aさんは作曲家でピアニスト、Bさんは高校の先生で二胡演奏者。その回答に、「赤ちゃん」のように①型で発音される語は中にいずれもなかった。

「^{あか}赤とんぼ」という語のアクセントについては、1984年～1985年第4期当時北京語言学院にある「大平学校」の日本語研修期間中に、金田一春彦先生は「アクセントと歌」の講演で、「赤とんぼ」は①型の頭高型の名詞なので、そのため昔の童謡の「あかとんぼ」のメロディーもアクセントの高さに沿って作曲され、「あかとんぼ」^{ソドドレミ}になったと、われわれ中国人日本語教師に歌までご披露され力説されたことは今でも鮮明に記憶している。しかし、その後の1986年に私が留学で来日しその後20年間も日本に滞在しているが、「あ」を強く高く発音される「あかとんぼ」は耳にしたことがなかった。余談ではあるが、勉学研究の合間に「アルバイト」で中国二胡を教えたりするが、劉長福編曲の「紅蜻蜓(あかとんぼ)」の弾き方を説明するときにも、「赤とんぼ」は①型の頭高型の言葉で、「あ」を強く高く発音するからメロディーもそういうふうに作曲されたよと補足しても、二胡クラスには12才から80才の二胡生徒がいるが、普段そのように発音する日本の方はおらず、皆例外なく③型の中高型で「あかとんぼ」を発音していた。日本の若者の平板語調の流行で、あと何年か立って、さらに少子化も進み、中村八大作曲のあの有名な「こんにちは赤ちゃん」という歌さえ忘れたころには、「^{あか}赤ちゃん」の①型頭高型アクセントも「変調」してしまうかもしれないと入らざる心配をするが、これもアクセントの弁語機能の機能転換だと考えれば納得するかもしれない。

表3 ^{あめ}雨+名詞

語例	3拍語	4拍語	5拍語
^{あめ} 雨①		①型の語 ^{あめかぜ} 雨風 ②型の語 ^{あめあし} 雨足 ^{あめゆき} 雨雪	③型の語 ^{あめあ} 雨上がり ^{あめおとこ} 雨男 ^{あめもよう} 雨模様
^{あま} 雨 (「あめ」の音便)	②型の語 ^{あまぎ} 雨着 ^{あまぐ} 雨具 ^{あまど} 雨戸 ③型の語 ^{あまぎ} 雨着 ^{あまま} 雨間	②型の語 ^{あまごい} 雨乞 ^{あまどい} 雨樋 ^{あまみず} 雨水 ^{あまもり} 雨漏 ③型の語 ^{あまがさ} 雨傘 ^{あまぐも} 雨雲 ^{あまぞら} 雨空 ^{あまつぶ} 雨粒 ④型の語 ^{あまよけ} 雨避 ①型の語 ^{あまおち} 雨落 ^{あめだれ} 雨垂 ^{あまよけ} 雨避	③型の語 ^{あまおお} 雨覆い ^{あまがえる} 雨蛙 ^{あまがっぱ} 雨合羽 ^{あまぐもり} 雨曇 ^{あまざらし} 雨曝 ^{あまじたく} 雨支度 ^{あまもよい} 雨催 ^{あまもよう} 雨模様 ^{あまやどり} 雨宿

^{あめ}雨は^{あめ}飴とアクセントで意味を区別している名詞である。表3のように、雨は「あめ」から「あま」へ音便した名詞も数多くある。

表 3 を見ればわかるように、「雨」以外に^{あめ}①型の頭高型の語は「雨風」の^{あめかぜ}1語のみである。

言うまでもなく、東京語アクセントの機能転換はこの3語のみの現象では決してない。上述の例からは、東京語のアクセント全体において、単語から複合語になっていく場合、アクセントは変調し、弁語機能から統語機能へ機能転換が起きることは明らかである。

2.2. 東京語アクセントの統語規則

東京語アクセントは弁語機能から統語機能へ機能転換する場合、それに適応する規則があるが、これを東京語アクセントの統語規則と呼ぶことにする。

今までの先行研究では、東京語アクセントの表記について、特に起伏式アクセントの表記では、何拍目にアクセントの核があるかを表記する場合、いずれも②、③、④、⑤のように語の先頭から数えて表記する方法を取っていた。しかし、複合語の場合は、前部と後部の語のアクセントは如何にかかわらず、個別の例外を除いては、後ろから数えて3拍目にアクセントの核が来ることが圧倒的に多いことが分かっている（朱 1994）。したがって、複合名詞のアクセントの規則としては2種類、即ち、①型の平板型と、後部要素の拍数によって決まる中高型。後部要素が2拍以下は②型、3拍以上は③型の中高型に統括することができる。後ろから数えて3拍目は特殊拍であれば、アクセントの核は自動的に1拍前にずれるが、表記は③に統一する。

- a. ^{ちゅうか}中華① + ^{りょうり}料理① → ^{ちゅうかりょうり}中華料理③
- b. ^{ちゅうか}中華① + ^{しそ}思想② → ^{ちゅうかしそ}中華思想③
- c. ^{ちゅうか}中華① + ^{じんみん}人民③ + ^{きょうわこく}共和国③ → ^{ちゅうかじんみんきょうわこく}中華人民共和国③
- d. ^{ちゅうか}中華① + ^{ぶんめい}文明② → ^{ちゅうかぶんめい}中華文明③
- e. ^{ちゅうか}中華① + ^{ふう}風(造語) → ^{ちゅうかふう}中華風②

上の例はいずれも前部名詞と後部要素構成の複合名詞であるが、前部名詞のアクセントは後部要素結合によって失い、複合名詞全体に新しいアクセントが付与された。これは前述した日本語アクセントの変調とみてもよい。複合名詞は拍数が多い場合、アクセント核を前から数えるより後ろから数えやすいので、伝統表記の①、④などより、②③のような表記を提案した(朱 1994)。日本語のアクセントは有核か無核かに分かれるが、有核の場合、一語にアクセント核は二箇所に分かれて存在しないのが規則である。複合名詞は付与された新しいアクセントによって一語であると認識され、この新しいアクセントの形成は即ちアクセントの統語規則である。複合名詞のように、音節(拍、

モーラ)が多ければ多いほど、それだけでも言葉の意味が限定されるようになり、同音異義語がなくなり、アクセントも自然にその弁語機能が弱まって、代わって統語機能が強まるわけである。

複合名詞のアクセントは後部要素によって決まるから、前部名詞は何拍、何語であっても本来のアクセントが変調するため、一般名詞のアクセントに比べるとより規則的であることがわかる。後部要素は1音節語(特殊拍を含む)で、2拍以下の有核の語では②型が多い。なごや①+し(造語)→なごやし②(名古屋市)、ペキン①+し→ぺきんし②(北京市。「一市」のアクセントは「一し」の直前に特殊拍でもアクセントの核がくる独立性のある語である、早田 1999)。後部要素は2音節3拍以上の語で、a. c.のように有核の語はアクセント核がいきるが、b.のように無核の語では後部の第1音節にアクセント核が付与される。dのように後部要素の後ろから数えて3拍目に特殊拍の場合、アクセントの核は1拍前にずれるが、表記としてはいずれも③とする。例えば、

あいち ばんぼく あいちばんぼく せいか だいがく せいかだいがく
愛知①+万博②→愛知万博③ 清華①+大学②→清華大学③

そして、この複合名詞の統語法則はひいては複合語全体に適応できると考えている。

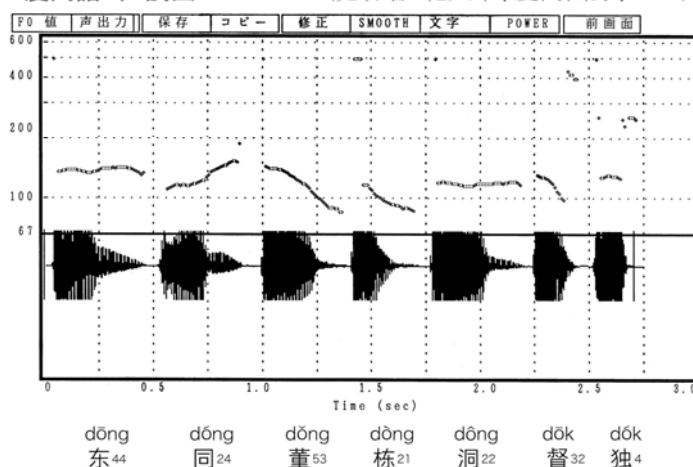
3. 厦門語の変調と統語機能

厦門方言は中国語の方言の中で最も古い方言といわれている。厦門語の声調は、ほとんどの音節(漢字)が本調(Basic Form)と変調(Sandhi)を合わせ持ち、そして複合名詞の場合は、最後の音節(漢字)が本調を保持し、その前の音節(漢字)はほとんどすべて変調する声調交代が起きる。

3.1. 厦門語の声調

厦門語の声調は厦門語話者のご協力により、「厦門語7声調図」のように、発音者の録音を音響機器の出力できれいな高さを示すピッチ線を出すことができた。厦門語の声調の表記は北京語と異なる独特なところがあるが、声調調値の記述は伝統の5音階表記法に従った。5音階表記法は劉復の「四声実験録」に始まり、記述は五線譜を用いていた。後に羅

厦門語7声調図 (発音者: 紀太平、厦門出身、1994)



常培の「厦門音系」も五線譜を用いて厦門語の声調を記述した。今は一般的に数字譜⁵⁾を用いるようになり、五線譜より記述が便利になったが、中国語の声調はトーンといわれるように音階的なものであり、決して単なる数字の表記と見てはならない。

現在は中国語の声調表記は高さを示す特殊な記号類を用いたりするが、声調のピッチが分る反面、具体的な高さがわかりにくい。数字譜の場合は音階なのですぐに高さが分るうえ、印刷が難しい特殊な表記でもなく、本稿では5音階表記法に従った。

3.2. 厦門語の変調

厦門語の辞書を調べてみると、二字以上の熟語の場合、前部名詞の声調は本調と変調が同時表記になっている。これは、厦門語の変調はいかに一般的であるかが分かる。表4に示しているように、厦門語の複合名詞は後部要素の声調が保持し、前部の声調が変調する点では、日本語の複合名詞の統語規則と共通するところがあることがわかる。

表4 厦門語声調の本調と変調⁶⁾

声調種類	本調調値	語例	変調調値	語例	変調環境
第1声	44	秋 ⁴⁴	33	秋 ⁴⁴ + 天 ⁴⁴ = 秋 ³³ 天 ⁴⁴	0 と軽声の語以外
第2声	24	来 ²⁴	33	来 ²⁴ + 去 ²¹ = 来 ³³ 去 ²¹	
第3声	53	冷 ⁵³	44	冷 ⁵³ + 風 ⁴⁴ = 冷 ⁴⁴ 風 ⁴⁴	
第4声	21	浸 ²¹	32	浸 ²¹ + 水 ⁵³ = 浸 ³² 水 ⁵³	
第5声	22	讓 ²²	21	讓 ²² + 步 ⁴⁴ = 讓 ²¹ 步 ⁴⁴	
第6声	32	結 ³²	4	結 ³² + 晶 ⁴⁴ = 結 ⁴ 晶 ⁴⁴	
第7声	4	落 ⁴	21	落 ⁴ + 雨 ²² = 落 ²¹ 雨 ²²	

表4のように、厦門語の声調は本調7種類、変調も7種類あるが、調値が同じものを除けば本調+変調は10種類あることがわかる。厦門語の声調調類を次のようにまとめることができる。

厦門語声調の種類

第一声：陰平半高平調，調値44，第三声の変調

第二声：陽平中昇り調，調値24

第三声：陰上高降り調，調値53

第四声：陰去低降り調，調値21，第五声の変調

第五声：陽去低平ら調，調値 22

第六声：陰入中降短促調，調値 32

第七声：陽入半高短促調，調値 4，第六声の変調

第八声：陽去中高平調，調値 33，第一声第二声の変調のみ

第九声：陰上半高降調，調値 32，第四声の変調のみ

第十声：陰去低降短促調，調値 21，第七声の変調のみ

4. おわりに

上述のように、中国語北京語や英語などでは、単語の声調やストレスアクセントを習得することは非常に重要であるのに対して、日本語のアクセントの習得と教育指導においては、単語レベルのアクセントを習得することは言うまでも重要であるが、複合語になると変調する日本語アクセントの統語規則の習得と教育指導も重要視されなければならないと考えている。厦門語の場合は本調と変調の同時習得が必要で、一語は2タイプの声調を習得しなければならない。中国語の方言においては、最も習得が困難な方言の1つである。

なお、例外として、日本語の複合名詞について、動詞的な働きのある名詞が存在する場合、一語として看做さずに、新しいアクセントによって統語されない。例えば、

こうむ しっこう ぼうがい こうむ しっこうぼうがい
公務① + 執行① + 妨害① → 公務① 執行妨害③

これは「公務を執行妨害する」というような意味で、名詞句と考えられる(早田 1999)。厦門語も、名詞でない熟語、主語と述語の組み合わせの熟語は変調しない。例えば、

我⁵³ + 爰²¹ + 食⁴ → 我⁵³ + 爰⁵³ + 食⁴

そして、厦門語も北京語と同じように軽声があるが、軽声のある単語は声調であると同時にストレスアクセントでもある(早田 1999)。従って、厦門語の声調は軽声の語が後続する場合は変調しない。

西⁴⁴ + 勢 → 西⁴⁴ 勢 (西方) 老²² + 去 → 老²² 去 (死去)

日本語や英語などのアクセントはどこに位置するかを問題にするが、声調はどの種類であるかが問題になる。中国語は音節声調言語であり、日本語は単語声調言語であるように異なる言語であるが、「声調という術語を音節のみが担うものと限定せず、単語や形態素も担えるものと定義すれば、日本語の声調を漢語(漢民族の言語)をはじめとする中国の種々の言語・方言の声調とも比較できることになる」(早田輝洋 1999)。これからも日中音声学の比較研究がもっと広がることが期待できることであろう。

注：

1. 「音調」とは狭義的に日本語のアクセントの中国語訳である。他に「重音」の訳語もあったが、「重音」は一般に英語のストレスアクセントの訳語として使用され、日本語のアクセントの場合は不適切な訳語である。初めて「音調」と訳して使用するようになったのは 1970 年代で、厦門大学日本語学科の黄国雄先生であった。早田 1999 の「音調」は広義的に日本語のアクセント、声調などを包括した術語である。なお、本稿では、弁語機能を「辨義機能」、統語機能を「構詞機能」と中国語訳して使用する。
2. アクセントの核とは、日本語の起伏式アクセントの場合、連続した高い拍の下がり目があり、その下がり目の直前の拍のことを「アクセントの核」という。ほかに「アクセントの滝」ともいう。参考までに「音節の核」は peak (峰、頂点、今石元久 2005)、nucleus of syllable (城生佰太郎 1988) という。
3. ①型②、③、④などとは、和田実 1875 のアクセント表記法。このほかに起伏式には、頭高型、中高型、尾高型と平板式に平板型などがある。
4. 四声とは中国漢民族の言葉の声調のことであるが、ここでいう四声は狭義的に北京方言の 4 種類の声調のことをいう。
5. 数字譜は 18 世紀フランスを代表する思想家、啓蒙家、小説家、音楽家のジャン＝ジャック・ルソー (Jean-Jacques Rousseau 1712～1778) が 1742 年に発案した楽譜である (『音楽記譜法』)。即ち、アラビア語数字の「1, 2, 3, 4, 5, 6, 7」で「ド、レ、ミ、ファ、ソ、ラ、シ、ド」を表す。中国では「簡譜」と言っても、五線譜よりも一般に作曲や演奏に使用している楽譜である。日本ではいまでもハーモニカや大正琴等の楽譜に使用し、かつては流行した楽譜である。中国語声調の表記はこの数字譜を「1, 2, 3, 4, 5」まで使用し、5 音階表記法というが、日本語アクセントも小森法孝 1987 は「ドミの理論」を提唱した。
6. 印刷上便宜のため、厦門語例の発音表記及び国際音標表記は省略した。

参考文献

朱新建 (1994) 「厦門語と日本語アクセントに関する一考察」、愛知学院大学教養部紀要第 4 2 巻第 1 号

早田輝洋 (1999) 『音調のタイポロジー』、大修館

朱新建 ZHU XINJIAN、男、愛知学院大学外国人教師、

Email: molihua@gctv.ne.jp

The syntactic function of the Japanese accent seen to a compound word